

こばやかわしゅうせい
小早川秋聲

1885年9月26日
～1974年2月6日



あらゆる武術に
精通していた
スポーツマン
好きな食べものは
牛肉、中華料理、マカロニ

父は東本願寺の
経理を務めた僧、母は元攝津国
三田藩主の養妹という家庭に
生まれ、幼少期を神戸で過ごす。
7歳から仏教の経典を学び、
9歳で僧籍に入る。



おやつの代わりに毎日半紙を
ほしがるほど絵が好きで、
12歳頃からは熱心に
博物館へ通い模写をする。

16歳の時
谷口香嶠に師事する。
先輩の津田青楓、
後輩の野長瀬晩花と
あわせて、後に谷口塾の
三人男と呼ばれる。



谷口香嶠



野長瀬晩花
12歳



津田青楓
21歳



秋聲
16歳

※入塾した時期はズレている

20歳の時には一年志願兵として
騎兵連隊に入隊し、日露戦争に従軍。
22歳で陸軍騎兵少尉となる。
馬術にとっても長けていた。



秋聲は弁論明晰な
快男児で、どんな相手でも
分け隔てなく談笑する
ような人柄だったそうだ。



京都市立絵画専門学校が
創立された時、香嶠に推挙
されるが、半年で退学して
中国へ赴く。

これを機に
秋聲の国外に対する
好奇心は強くなっていく。



秋聲は30代頃から
世界各国を飛び回るようになる。
中国、インド、西欧、中欧、
アメリカまで…



その旅は写生のための旅には留まらず、
秘境の地を訪ね
先住民族と食事を共にする、
武装集団に囚われるが馬術と武術の
腕を認められ勧誘される、
冬のアルプス山脈へ登山して
遭難しかけるなど冒険そのもの。

旅を通して様々な画題を得て
展開されていった秋聲の作品は
それぞれの土地特有の香りが
漂い、味わい豊かである。

大作の評判も良く、
これから帝展での活躍が
期待された矢先、
戦争が本格化してゆく。





画家、僧侶といえど、そこは戦場。
兵士達と同じく満州の極寒に耐え、
四日四晩一睡も出来ないような
生活の中、目の前の光景を描き
洩らさないようにとペンを走らせる。



一九三一年以降は
従軍画家、東本願寺の慰問使として
戦地へ派遣される。



戦争を直に見つめ続けた秋聲は
「戦争は国家として
止むに止まれぬ事とは申せ、
惨の惨たるもの之あり候」
という言葉を残している。



彼の描いたスケッチには
兵士の寝顔を描いたものもある。
生死の境にある彼らから
垣間見える人間らしい瞬間に
惹かれたようである。



一方、搬出の手伝いに来た
一人の女性は、「國之楯」を見て
その場に泣き伏したという。

「國之楯」は戦争末期の
一九四四年に一旦完成したが、
戦後に加筆される。
制作中のアトリエを訪れた
第十六師団長は、「國之楯」を目にし
圧倒された様子で帽子をとり
画面に向かって深々と頭を下げ、
将校たちも一斉に背筋を伸ばし
敬礼したという。

戦後、案内も乞わずに
秋聲の元を訪れた記者がいた。

貴方にとって
戦争とは？

と無遠慮に
たずねられた秋聲は、



何も
言うことはない
帰れ!!

それまで
聞いたことが
ない程の大声で怒鳴ったという。
その時傍に居た長女の和子は、
「父にとって、まだ戦争は終わって
いないのだ」と実感したそうだ。

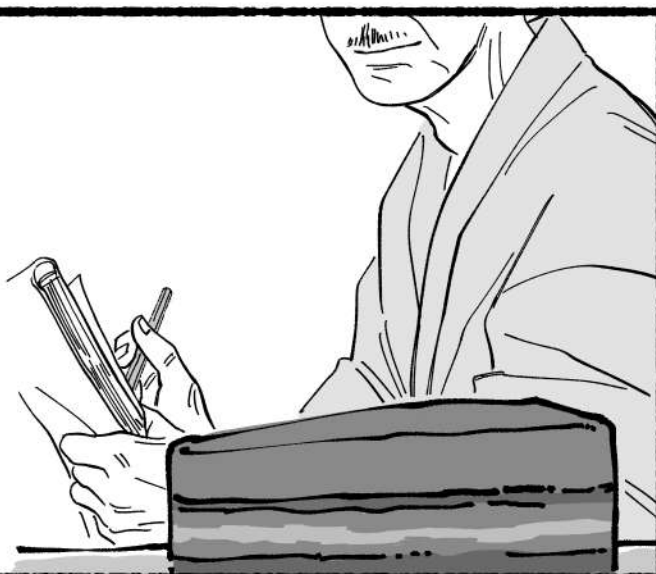


従軍中の疲労が祟り
内臓を病んでしまったため、
一九四七年以降は画壇への出品を
控えるようになるが、
変わらず制作は続け、雑誌への
絵と文の執筆も盛んに行う。



秋聲が生涯好み、
長女の名づけの由来にもなった
「天下和順」とは、浄土三部経の一つ
「無量寿経」の中にある経文で、
平和な世の中を願い唱える
偈文である。

一九二九年あたりからは
制作した諸作に「天下和順日月清明」
という一文を書き込んでいる。



「人間は万事は経験である」
と言った秋聲は、あらゆる現場に
赴き、多くの人と時を共にし、
そして同時に
多くの人の死と向き合い続けた。
一九七四年の冬、
老衰によりこの世を去る。
享年八十八。

小早川秋聲最後の絵は、
亡くなる六時間前に長女和子が
届けたチョコレートケーキの
スケッチであった。